

遠いむかし。お月さまがどこに住んでいて、どんな人なのか、だれも知らなかったところのことです。

あるとき、アギサという男の人が、いました。

「おれ、お月さまをさがしに行つてくる」

アギサは、小さなカヌーを作つて川にうかべ、お月さまが毎晩昇^{のぼ}つてくる方角に向けて、川上^{かわかみ}へとこぎ出しました。

しばらくこいで行くと、ひとりのおばあさんに会いました。おばあさんは、アギサに、

「どこに行くんだね」とききました。アギサは、

「お月さまをさがしに行くんだ」と答えました。すると、おばあさんは、

「やめたほうがいい。月は遠い。とちゅうで何が起^{おこ}るか分からないよ」といつて止めました。けれども、アギサは、

「かまわない。おれは行くよ」といつて、なおもこいでいきました。

まもなく、はえの国にやつて来ました。はえたちは、アギサに向かつて、わんさとおしよせてきました。アギサは、さつとカヌーをひっくり返して、その下にかくれました。はえたちは、カヌーを飛びこえて、行つてしまいました。

アギサは、カヌーを起こして、また旅を続けました。

しばらく行くと、ある村に着きました。村の人が、

「どこに行くんだね」とききました。アギサは、

「お月さまをさがしに行くんだ」と答えました。

「やめたほうがいい。月は遠い。とちゅうで何が起^{おこ}るか分からないよ」

「かまわない。おれは行くよ」

アギサがカヌーをこいで行くと、すずめばちの国にやつて来ました。すずめばちは、アギサに向かつて、わんわんぶんぶん音を立てて向かつてきました。アギサは、さつとカヌーをひっくり返して、その下にかくれました。すずめばちは、さんざんカヌーを刺したあげく、行つてしまいました。

またしばらく行くと、また別の村に着きました。村の人が、

「どこに行くんだね」とききました。

「お月さまをさがしに行くんだ」

「やめたほうがいい。月は遠い。とちゅうで何が起こるか分からないよ」

「かまわない。おれは行くよ」

すると、こんどは、みつばちの国にやって来ました。みつばちは、わーんと音を立てて向かってきました。アギサは、またカヌーの下にかくれました。

こうして、アギサは、カヌーをこぎ続けて、白へびの国を通りぬけ、黒へびの国を通りぬけて、どこまでもどこまでも行きました。

ある日の夕方、大きなイリモの木の下にたどり着きました。家を出たときには、お月さまはまだ糸のように細かったのですが、旅を続けているあいだに、満月になり、またやせて細くなっていました。

アギサは、イリモの木の下で、ひとりのおじいさんに会いました。おじいさんは、

「おまえさん、何をしに来たのかね」とたずねました。アギサは、

「お月さまをさがしにきたんだ」と答えました。すると、おじいさんは、

「なるほど。そんなら、ここにいますといい。ここは月の家だから。夜が明ける前に起きたら、月に会えるだろう」といいました。

アギサは、よろこんで、横になってねむりました。ところが、あまりにつかれていたので、夜が明けるまで目が覚めませんでした。

夕方になって、おじいさんが現れて、たずねました。

「月には会えたかな」

「いや、寝すぎてしまった」

「それなら、あしたこそ早く起きなさい。月は明けがたここを通るだろう」

ところが、こんどもまたアギサは寝すぎてしまいました。夕方、おじいさんが現れて、

「どうだ。朝の月に会えたかな」とたずねました。

「いや、また寝すぎた」

そうこうするうちに、また新月がめぐって来ました。

ある朝、おじいさんではなくて、小さな坊やが現れました。アギサがふしぎに思っていると、坊やはたずねました。

「夕方の月に会ったかい」

「いいや」と、アギサは答えました。

坊やは、毎日大きくなり、満月のころにはりっぱな男の人になっていました。

男の人は、いいました。

「月に会えたかね」

「いや、まだだ」

「それなら、昼のうちに寝て、夜起きているといい。月は、このイリモの大木に登って、それから天へ飛ぶだろう」

アギサは昼間寝て、夕方起きだしました。そして、すわってお月さまを待ちました。やがて、さっきの男の人がやって来て、イリモの木に登り、てっぺんに着いたかと思うと、ひらりと空にまい上がって、大きな満月にすがたを変えました。

アギサは、はっと気がつきました。

「そうか、おれはこのあいだから、そうとは知らずにお月さまと話をしていたんだ」

そうです。アギサがここに来たときから、お月さまは、おじいさんから坊やに、坊やから男の人と変わっていったのです。アギサはとくにお月さまと会っていたのでした。

アギサはうれしくて、安心して、その晩はぐっすり眠りました。

つぎの朝、お月さまは、でっぴりした大きな男になってやって来ました。

「どうだ、月は見えたか」

「見えたとも」と、アギサは答えました。「いや、うれしいよ。村じゃあ、あんたがだれで、どこに住んでいるかと、毎日大さわぎなんだから。こうして、あんたに会えて話もできた。これから村に帰って、みんなに教えてやるよ」

その晩、アギサは帰るしたくをしました。お月さまは、夕方、空に行き、夜が明けるころにもどってきて、アギサのカヌーに食べ物をつぱい積んでくれました。それから、アギサがカヌーに乗りむと、空を泳がせて、アギサの村まで運んでくれました。

まもなく、夜が明けました。アギサは、村の人たちに、旅の話をし、すずめばちやみつばち、白へびや黒へびにおそわれたときのカヌーのきずを見せました。そして、お月さまは男で、坊やから始まってしだいに年をとって行くことを教えました。今でもみんなは、それを信じています。

おしまい

村上郁再話

